「本の紹介」,「書評」,「書評の紹介」の三つを一緒に

モーティマー・J・アドラー　チャールズ・V・ドーレン　共著
外山滋比古・槇未知子　共訳

『本を読む本』

原書名 “How to Read a Book”
（講談社学術文庫・920 円＋税）

編集：柳沢克央（やなぎさわかつひろ）
（上田仮説サークル）

タイトルの通り，この本は読書法の本である。しかも，「非常に律儀で，極めて論理的な教則本」とでも言うべきものである。初版は米国で 1940 年に出版された。

この本は 2016 年 1 月 27 日（水）に恩師，戸田忠雄先生より紹介された。紹介してもらって本当に良かったと思う。今までこの本を知らずに読書をしていたことが残念でならない。もっと早く知っていればよかった。学士・修士・博士は本書にある読書法を知っていることが必要である。

この本の「存在を知らずに」（注意：「読まずに」ではない。「知っていて読まない権利」は認められるべきであると思う）教壇に立つことは，運転免許証を持たずに高速道路で運転するに等しいくらい無茶なこと，または，デール・カーネギー著『人を動かす』の存在を知らずに教員を務めるくらい無謀なことであったと言うのはいささか勇み足か…。

ここに紹介して，未読の方に強く薦める。ただし，本書に書かれている方法

のとおりに読書するべきだとは言わない。本書を精読して，いったん忘れた上で，各自が自分の方法で読書をしていけばよいと思う。

*

本書によれば，読書には四つのレベルがあるという。

「一つのレベルは次のレベルに吸収され，累積されていくから，もっとも高度の第4レベルには前の三つのレベルがすべて含まれていることになる。それらを経てはじめて，最後のレベルに到達できるのである」（本書）。

…ちょうど，四段階のピラミッドがあり，頂上に第四レベルがある様子を思い浮かべれば適切であろう。

*

レベル1は「初級読書」である。「その本は何を述べているか」ということが読み取れる段階である。

レベル2は「点検読書」である。「系統立てて拾い読みする」ことである。この読み方は時間に重点を置くことが特徴である。「この本はどのように構成されているか」とか，「それはどういう種類の本か」という問題意識で素早くざっと読むことである。「ほとんどの人はこの読書の値打ちに気づいていない」と著者は言う。

レベル3は「分析読書」である。この読み方では時間に制限はない。フランシス・ベーコン（英国・1561～1626）は「書物には味わうべきものと，呑み込むべきものとがある」と述べたという。「分析的に読む」とは，本を「よくかんで消化することである」。「分析読書は，何よりもまず理解を深めるためのもの」であるという。

レベル4は「シントピカル読書」である。日本語でいえば「比較読書法」とでもいうべきものである。「シントピカルに読むということは，一冊だけではなく，一つの主題について何冊もの本を相互に関連づけて読むことである。だが，単に各テキストを比較するだけでは，シントピカル読書として十分とは言えない。熟達した読者は，読んだ本を手がかりにして，《それらの本にはっきりとは書かれていない》主題を，自分で発見し，分析することもできるようになるは

ずである。したがって，シントピカル読書は，読者に対する要求度のもっとも高い積極的な読書法になる」。

これを読むと，「板倉聖宣先生の提唱する研究法」＝「十万円研究法」はまさに本書に書かれている「シントピカル読書」であることがわかる。つまり，本書『本を読む本』の目指している最終到達点は，「自身の手で本や授業書を書く（著す）ことができるように目的意識を持って文献を読む」ことである。したがって，本書『本を読む本』は仮説実験授業研究会員の一定数の人にとっては，『本を書く本』（＝“How to Write a Book”）として読める本であるといえるだろう。本書から読み取れる読書の最高到達点は「創造」である。

*

身も蓋もないことを承知で書くが，本にはそれぞれの本に固有の「階級」または「格」がある。読者はその本の「格」に合わせた読み方をすることが必要である（「格が高い本」だけを読めば良いと言っているのではない点に注意されたい）。良い本とは「がっぷり四つ」に組んで思う存分に「格闘」すれば良いし，そうでない本とは「それなり」に「対話」したり，「チラ見」だけでおしまいにしたりすればよい。ただそれだけのことである。

また，本書には次のような言い回しで「分析読書」や「シントピカル読書」に相応しい本は極めて少ないことが述べられている。短い人生で本当に読み込むに値する本は多くないようだ。私は本書から「本は堂々と差別選別して扱うべし」という教訓を得た。

*

…西欧に限っても，これまで（原書の改訂版発行年 1972 年まで，と解釈できる）に出版された本の数は数百万冊に達する。だが，その大部分が，読書の技術を磨くのにふさわしい本とは言えない。誇張に聞こえるかもしれないが，実際，99%まではそういう本だと言っても過言ではない。つまり大部分の本は娯楽または情報のための本である。娯楽や情報も結構だが，ただこの種の書物は，何かを教えてくれるものではないから，拾い読みだけで十分である。

だが，本当に読書法や人間の生き方を教えてくれるような本もたしかにある。

百冊に一冊，いや一万冊に一冊しかないのかもしれないが，著者が精魂こめて書いたすぐれた本である。人間の永遠の問題に関する重要な洞察を与えてくれる本である。おそらく，こういう本は全部合わせても二，三千冊にも満たないだろう。こういうものこそ，読者に多くを求める本で，一度は分析読書を試みるに値するものである。読書技術を心得ていれば，一度熟読するだけで，その本が与えてくれるものを残らず吸収することもできるだろう。こういう場合は再読の必要はないから，読書を終えて本棚におさめておけばよいわけである。

再読の必要がないということは，本を読んでいるときの感じでわかるものだ。その本を読むことによって精神が向上し，理解が深まるにつれて，その本から吸収するものはもうないということが，勘でわかるのである。

読むに値する数千冊のうち，本当に分析読書に値する正真正銘の良書となると，百冊にも満たないだろう。最高の読書術を駆使しても，完全には理解できないような本である。……（本書『本を読む本』の中の「本のピラミッド」の項［250ページ］より）

*

米国嫌いで知られた名コラムニストの故・山本夏彦氏（1915～2002）は『完本・文語文』（文藝春秋）の中で，「この世で真に読むべき本は東西の古典で十分であり，それらは百冊に満たない」という趣旨のことを述べていたが，米国産のこの本にほぼ同様のことが書かれているのはちょっとした皮肉（アイロニー）である。

*

本書の内容は1972年に米国で発行された改訂版に拠っている。2016年現在のインターネット社会に対応した解釈をすることも必要だろう。

たとえば，アマゾンなどのネット書店での書籍の購入法についてである。この場合，「店頭での点検読書」は不可能であることが多いから，かわりに，レビューを参考にして購入の可否を判断するという方法が重視されるだろう。良質のレビューを瞬時に見抜いて適宜参考にするという勘のようなものが重要になってくる。

だが，本書総体としてみれば，このような新解釈または修正は多くはないだろうと思われるので，とりあえずは本書の主張をそのまま受け入れてみて，不都合な点だけ，現代風・自分用に修正していけばいいのではないか。

*

次にネット上に公表されたレビューから本書の構成を明確に示しているものを引用し，コピー&ペーストで紹介する。要約者は不明。しかし，いい仕事であり，こうした先駆者がいると，自分で同様のものを作ってみようという気が失せてしまう…。

(http://honto.jp/netstore/pd-review_0601467836_191.html?pgno=17)

*

読書レベル

・第一レベル…「初級読書」その文は何を述べているのか。

・第二レベル…「点検読書」その本はなにについて書いたものであるか。この本はどのように構成されているか。どのような部分に分けられるか。

「点検読書」には二つのタイプがある。

① 組織的な拾い読み，または下読み

一，　表題や序文をみること。

二，　本の構造を知るためには目次を調べる。

三，　索引を調べる。

四，　カバーに書いてあるうたい文句を読む。

五，　その本の議論のかなめと思われるいくつかの章をよく見ること。

六，　ところどころ拾い読みしてみる。

② 面読み

理解できることだけを心にとめ難解な部分は飛ばして，どんどん読み続ける。

積極的読書への四つの質問

一，　全体として何に関する本か。

二，　何がどのように詳しく述べられているか。

三，　その本は全体として真実か，あるいはどの部分が真実か。

四，　それにはどんな意義があるのか。

本を自分のものにするには，

一，　傍線を引く。重要な箇所や，著者が強調している箇所に線を引く。

二，　行のアタマの余白に横線を入れる。下線を引くには長すぎるとき。

三，　☆印，※印，その他の印を余白につける。濫用はしない。

四，　余白に数字を記入する。展開の要点とうつり変わり。

五，　余白にほかのページのナンバーを記入。

六，　キー・ワードを〇でかこむ。

七，　ページの余白に書き入れをする。

理論的な本と実践的な本

知識を実用化するためには，知識を行為の規則に作り変えねばならない。「実態を知ること」から，「どうしたら目的に達することができるかを知ること」に移行しなくてはならない。つまり，事実を知ることと，方法を知ることの二つになる。理論の本は事実を教え，実践の本は方法を教える。

・第三レベル…「分析読書」系統だった読書活動。徹底的に読み，読み手として可能な限りきわめて高度の読書法。

分析読書第一段階　～何についての本であるかを見分ける～

①第一規則…読者はいま読んでいるのがどんな種類の本かを知らねばならな

い。これを知るのは早いほどよい。できれば読み始める前に知る方がよい。

②第二規則…その本全体の統一を，二，三行か，数行の文にあらわしてみる。

構想とプロット

一，ある本の構想を述べるにあたって，読者が著者の助けをどのくらいかりることができるか。

二，前にあげた要約の例が，それぞれの本の統一性を述べたものとして，絶対であると思わないこと。

③第三規則…その本の主な部分を述べ，それらの部分がどのように順序良く統一性をもって配列されて全体を構成しているかを示す。

アウトラインをつかむ

統一したときに主要部分はわかるかもしれないが，部分それ自体も複合的である。部分の大要を述べ，つまり部分をそれぞれ統一性と複合性をもった小さな全体とみて，その要約を試みる。

読む技術と書く技術

書くことと読むことの関係は，教えることとおそわることとの関係と同様，相互的。

④第四規則…著者の問題としている点は何であるかを知る。

著者の使う言葉に注意する

ひとつの単語が一つの意味しかあらわさないなら，著者が重要な意味に使っている単語を見つけさえすれば，本と折り合いがつくことになる。だが，一つの単語には多くの意味があり，特に重要な単語には多くの意味があるのがふつう。著者がある意味で使った単語を，読者が別の意味に理解したとする

と，言葉の使い方では，著者と読者は折り合いがついていない。

分析読書第二段階　～内容を解釈する～

内容解釈するための規則は文法と論理の二つの側面がある。

キー・ワードを見つける
著者が，特殊な意味に使っている言葉だけが，著者にとっても，読者にとっても重要。

⑤第五規則…キー・センテンスを見つける。
著者が伝達すべきもっとも重要なことは，あることがらについての著者自身の判断（肯定ないし否定）の表明と，その理由である。

⑥第六規則…命題を見つける
文を構成する，とくに重要な単語を解釈することによって命題をつかむことができる。命題を見つける場合には，より広く前後の文脈を利用する。複雑な分は，二つ以上の命題をあらわしている。

⑦第七規則…論証を見つける。
ある命題を論証するための論拠となる一連の命題に関するもの。
一，最初に結論があれば理由を探し，理由が先に見つかればそこから導かれる結論を検討する。
二，事実によって，一般化を証明する方法（帰納法）と，一連の一般的叙述によって一般法則を発見する方法(演繹法)がある。
三，著者が「仮定」しなければならないのは何であるか，論証や証拠によって「立証できるもの」は何か，論証を必要としない自明のことがらは何であるか，ということをしっかり見定める。

⑧第八規則…著者の解決を検討する

第七規則の一～三からの「解釈」で第八規則は導き出される。また分析読書の第一段階(「概略」)と第二段階(「解釈」)とを結びつけるもの。

したがって，著者の解決が何であるかを検討すること。

分析読書第三段階　～知識は伝達されたか～

(A)知的エチケットの一般的心得

・「概略」と「解釈」を終えないうちは，批評にとりかかからないこと。(わかったと言えるまでは，賛成，反対，判断保留の態度の表明を差し控える)

・けんか腰の反論はよくない。

・批評的な判断を下すには，十分な根拠をあげて，知識と単なる個人的な意見を，はっきり区別すること。困難だが，誤解と無知を取り除けば大部分の反論は解消する。

(B)批判に関してとくに注意すべき事項

・著者が知識不足である点を，明らかにすること。

・著者の知識に誤りがある点を，明らかにすること。

・著者が論理性に欠ける点を，明らかにすること。

・著者の分析や説明が不完全である点を，明らかにすること。

上３つの点は反論の心得。この３つが立証できない限り，著者の主張にある程度，賛成しなくてはならない。一番下の点の批評に照らして，全体について判断を保留する場合もある。

・第四レベル…「シントピカル読書」比較読書法。ひとつの主題について何冊もの本を相互的に関連づけて読むこと。

シントピカル読書の準備作業　～研究分野の調査～

一，図書館の目録，他人の助言，書物についている文献一覧表などを利用して，主題に関する文献表を作成する。

二，文献表の書物を全部点検して，どれが主題に密接な関連をもつかを調べ，また主題の観念を明確につかむ。

（注意　これら二つの作業は，厳密に言えば，必ずしもこの順番にするわけではない。つまりこの二つは，相互に影響しあうものだからである）

シントピカル読書　～準備作業で集めた文献を用いて～

第一段階

準備作業で関連書とした書物を点検し，もっとも関連の深い箇所を発見する。読者および読者の関心事が，最優先。

第二段階

主題について，特定の著者に偏らない用語の使い方をきめ，著者に折り合いをつけさせる。

第三段階

一連の質問をして，どの著者にも偏らない命題をたてる。この質問には，大部分の著者から答えを期待できるようなものでなければならない。しかし，実際には，著者が，その質問に表立って答えていないこともある。

第四段階

さまざまな質問に対する著者の答えを整理して，論点を明確にする。あい対立する著者の論点は，必ずしも，はっきりした形で見つかるとは限らない。著者の他の見解から答えを推測することもある。

第五段階

主題を，できるだけ多角的に理解できるように，質問と論点を整理し，論考を分析する。一般的な論点を扱ってから，特殊な論争に移る。各論点がどのように関連しているかを，明確に示すこと。

（注意　弁証法的な公平さと客観性とを，全過程を通じて持ちつづけることが望ましい。そのために，ある論点に関して，ある著者の見解を解釈するとき，必ず，その著者の文章から原文を引用して添えなくてはならない）

引用以上

*

本書では書籍の目次および索引を熟読することが重要であるということが述べられている（42ページ）。ところが，こう主張している当の本書の日本語版には索引がない。主張しているからには，おそらく原書には索引があったのだと推測できる。翻訳時の手抜きがあるのかも知れないが，詳細は不明である。こうした書籍にこそ索引をつける作業は極めて重要なはずであるのだが…。

さらに言う。原書には「分析読書」をするに値する137冊の推奨図書リストが付されているようだが，これも出版事情の違いにより邦訳には掲載されていない。やむを得ないかも知れないが，残念だ。原書はアマゾンで簡単に入手できるようだから，折を見て買って読んでみようと思う。

*

2016年2月10日（水）に紹介者の戸田忠雄先生にお会いする機会があったので，「とても面白い本でした。この本は『本を読む本』ではなく，むしろ，『本を書く本』だと思いました」と感想を伝えたら，喜んで下さった。

*

本書は読書論の古典に相当する存在であるから，ネット上に多数の書評が公開されている。私が検索した中で最も優れていると思われる書評を次にコピー&ペーストで紹介する。こういう書評を読んでしまうと，自力で書評を書こうという気が失せてしまう…。評者はDain氏，執筆時期は2008年12月と思われる。（http://dain.cocolog-nifty.com/myblog/2008/12/10-462b.html）

*

上から目線の「本を読む本」を10倍楽しく読む方法

もはや読書論の古典とまであがめたてまつられている「本を読む本」。

これを，なるべく楽しく読む方法をご紹介…というのも，手にしたかたならご存知だろうが，スーパー上から目線に辟易すること間違いないから。そして，もったいぶった言い回しで結局それかよ…とツッコミを入れるだろうから。

しかし，だからといって無用な本ではない。新入生から読み巧者まで，得るものは必ずあるはずで，説教臭さえ気にしないのであれば極めて意義深い一冊だとオススメできる。ここでは，本書にふれながら，わたしの「本を読みかた」について思うところを書く。誰かのヒントになればこれ幸い。

■　決まった読みかたなんて，ない

完成された本の読みかたなんて，存在しない。十人いれば十通り，百冊あれば百通りの読みかたがある。本書の著者アドラーをはじめ，識者(?)たちが「本はこう読め」と押し付けるたびに，ゲンナリしているし，その轍を踏まないよう注意しているつもり。

ただ，「うまい読みかた」というのは存在する。

では，「うまい読みかた」とは何ぞや？

これに答えるためには，まず，その本を読む「目的」を明らかにしなければならない。目的とは，「なぜその本を読むのか？」に対する具体的な返答だ。知識を得るためであれ，楽しみが目的であれ，必ず「○○したい」という返答に

なる。たとえば,「日本人のしつけは衰退してるって，ホント？」や，あるいは「江戸川乱歩のような短編を，読みたい」になる。

そうした「目的」にあった本が選ばれ，選ばれた本に沿った「読みかた」が存在する。「日本人のしつけ」が目的であれば，そうした事実や主張を探しながら読むことになるだろうし,「乱歩のような短編」なら，静かな暗い部屋で，好きなノットで読みたいもの。「〇〇についての知識を得る」や「△△のテーマを概観する」といった具体的な目的があって，それに適った読み方が,「うまい読みかた」。

よく使われる宣伝文句に,「ためになる本」とか「役に立つ本」がある。だが，なんの「ためになる」のか，あるいは，どんな「役に立つ」なのだろうか？これを意識せずに読んでいる限り，いつまでたっても雑学に毛が生えた程度でしかない。もちろん「読書に成果を求めない」といったスタンスもありだが，能動的に読むなら，まず「目的」が必要だ。

「本を読む本」で紹介されている読みかたは，知識を得ることが「目的」の場合に役に立つ。あるいは，特定のテーマを追いかけるときの「うまい読みかた」が記されている。

■　分析読書とシントピカル読書

本書のキモは第二部「分析読書」と第四部「シントピカル読書に尽きる。入門編の第一部は心得みたいなものだし，第三部「文学の読みかた」は著者の意向で大幅に割愛されている。ここでは,「分析読書」と「シントピカル読書」についてまとめてみる。

分析読書とは，一冊の書物から深い理解を得るための読みかたのこと。テー

マを把握し，内容を解釈し，著者のいわんとしていることを充分に理解したうえで，批評する。要するに，「流し読み」「拾い読み」ではない，ふだんのあなたがやっている読みかたのこと。

いまふうに言うならば，" So What ? "を連発して，トピックセンテンスを抜きだす。そこからイシューツリーを再構成して，論証の誤りや脆弱なところを衝いたり，前提そのものを疑ったりする読みかたになる。ロジカルシンキング本に親しんでいる方なら手馴れたものだろうが，1940年代に自分の言葉で書いたアドラーはえらいと思う。

そして，シントピカル読書とは，特定のテーマについて複数の書物を横断的に読むやりかたのこと。当然，ある本を読むと，そこから別の本へ派生して…が延々とくりかえされることになる。

おもしろいことに，著者アドラーは，「何を読むか」と「どんなテーマか」は相互に影響しあうという。準備の段階でできあがった読書リストを消化していくうちに，リストの順位が変動したり，想定外の本がランクインしてきたりするわけだ。

これもみなさんご存知のやりかただろう。巻末の「参考文献」をたよりに幅をひろげたり，amazonの「この本を買った人は…」をチェックすることでもできる。あるいは，図書館のレファレンスサービスを利用するのはどうだろう？テーマと目的を具体的に述べ，いままで読んできた本をならべると，次に読む資料のリストを示してくれる。複数の図書館にかけもちで相談すると効果的。「日本人のしつけは衰退してるって，ホント？」や，「乱歩みたいな短編」を問い合わせてもいい。質問と回答事例は，［レファレンス協同データベース］が参考になる。

いずれにせよ，最初の「目的」さえブレなければ，分析読書もシントピカル読書もハズさないはずだ。本書を立ち読みできるなら，p.172 に分析読書のまとめ，p.244 にシントピカル読書のまとめがある。ここだけ読んで，ピンときたら読む価値はあると思っていい。

■　「本を読む本」を批評する

分析読書の一環として，本を正しく批評しなさいという。著者の根拠と論理から，論証の完全性を疑う方法が紹介されている。

たしかに批評を心づもりして読むことで，本から得られる「目的」は大きくなる。そして，本書で解説される「反論を解消する」や「判断保留の重要性」などは，かなり役立つだろう。

しかし，その余勢を駆ってマキャベリ批評でボロを出す。著者は，「君主論」の次の箇所を，明らかな誤りだと断定している。(柳沢注：168 ページ)

古いと新しいとを問わず，すべての国家の基礎は良き法にある。国家の武力が十分でないところには良き法はあり得ない。よって武装国家は法治国家の条件である。

この部分について，著者アドラーは，こう批評する。

だが，よき法は十分な警察力に依存するという事実からは，警察力が十分であれば法は必然的に良きものとなる結論は導き出されない。この議論は，最初の仮定が果たして妥当かどうか疑わしいのに，それを棚上げした議論である。これは「不合理な推論」の例である。

(゜Д゜)ﾊｱ?

マキャベリは「武力は法治の必要条件」と述べているのであって，「武力は法治の十分条件」とは言っていない。アドラーは，マキャベリが出していない「警察力が十分であれば法は必然的に良きものとなる結論」をもってきて，「君主論」を批判している。これは，中公文庫版の「君主論」(p.68) も参照すると，よく見えてくる。

ところで，昔からの君主国も複合国も，また新しい君主国も，すべての国にとって重要な土台となるのは，よい法律とよい武力とである。よい武力をもたぬところに，よい法律のありうるはずがなく，よい武力があって，はじめてよい法律がありうるものである。

マキャベリは，武力の必要性を訴えているものの，武力さえあればよい法律があるとは述べていない。

もしもマキャベリが，「武力さえあれば法治 OK」と言っているのなら，アドラーが指摘する，その妥当性を示す根拠が必要になる。しかし，マキャベリ自身，「武力さえあれば」と思っていないから，本一冊になってる。武力だけではままならぬから，権謀術数や人身掌握の術を述べている。

つまり，アドラーは誤読か意図的か不明だが，マキャベリの主張を歪めたうえで，そいつを批評している。このように，書き手が言ってもいないことをでっちあげて，そいつを論破することで批判したつもりになる詭弁術を，「わら人形論法」(Straw man) という。

さらに，この箇所は，軍隊の種類と傭兵軍について検証する章で，マキャベリは歴史的事実から信頼に足る軍隊の種類を論考し，最終的には「自国軍」こ

そが頼りになるという結論を引き出している。法治と武力の話ですらなく，カンケーないところに噛み付いて「不合理な推論」とレッテルを貼るのは，言いがかりにひとしい。

つまり，マキャベリの主張のねじ曲げと，的はずれな批判の両方をしている意味で，アドラーは「君主論」を『分析読書』していないのではないかと。著者は哲学のセンセーだったらしいが，ロゴスはいのちだろうに。

あるいは，この「本を読む本」自体を分析的に読んでもらうことを期待して，こんな罠を仕掛けたのだろうか。批判読書を勧めておいて，自分が批判されるような「穴」を設けておくなんて，粋なはからいをするものだ。分析読書しなかったら，この「穴」に気づかないからね。

本書を「必読の書」ともてはやすのもいいが，まず隗よりスタート。ひととおり読んだら，本書そのものを俎上に載せてみるのもいい。

■　「本を読む本」に致命的に足りないもの

これまで，教養書や啓蒙書から知識を得るための「著者の読みかた」を紹介してきた。

では，小説などのフィクションを読むための「読書法」はあるのだろうか？——これが第三部「文学の読みかた」になる。ここは著者の意向により大幅に割愛されているものの，小説に対する著者の態度があからさまにミエミエで笑ってしまう。そして，本を読むうえで，いちばんだいじな心得が書いていないことに気づく。

「本を読む本」では，小説を読むための心得として，非常に多くのものを要

求する。面白かっただけではダメで，どこがどう面白かったのかキチンと説明できなくてはならないと。だから，審美せよ，鑑賞せよ，味わえ，学べ，追体験せよ，統一性を把握せよ，解釈せよとやかましい。なのに，もっとも大切なところが抜けている。

著者のスタンスに欠けているもの，それは，「その本を楽しんで読む」に尽きる。面白がって読む，同化して読む，面白いとこだけ読む，読まない，つまみ読み，ナナメ読み，音読，黙読，味読，好きに読めばいいんだよ，小説は。

著者アドラーは，読書を，高級な何かのように勘違いしているようだ。知識や教養を摂取するのに躍起になって，肝心の読書のよろこびを放棄している。知識欲を満足させる「たのしみ」ではない。あるいは，小難しい思想にくすぐられた自尊心の「よろこび」ではない。純粋に，単純に，本そのものをおもしろがって読む——そうした読みかたを，忘れてしまっているのではないかと。

ペナック先生の愉快な読書法　■　読まない権利

これはアドラーだけを批判できない。わたし自身，多かれ少なかれ，そうした姿勢を持っているのだから。知識が得られる，考え方を学ぶ，知的生産ができる——読書になんらかの報酬を求めている限り，どっこいどっこい。もちろん読書から利益を引き出そうとする姿勢は大切だが，「本を読む」ってそれだけだったっけ？

忘れられた読みかたを思い出すために，「読者の権利 10 カ条」が役に立つだろう。これは，「ペナック先生の愉快な読書法」で紹介されており，ちいさい子をもつ親にとって，かなり身につまされるに違いない。

「わが子を読書好きにしたい」という親の願いの裏側には，「見返りを求める

読書」が隠れている。この，見返りを求める読書こそが，本を読む喜びを失わせているという。読書の幸福を伝えるために，読者は次の10カ条の権利があるという。

1. 読まない権利
2. 飛ばし読みする権利
3. 最期まで読まない権利
4. 読み返す権利
5. 手当たりしだいに何でも読む権利
6. ボヴァリズムの権利（小説と現実を混同する権利）
7. どこで読んでもいい権利
8. あちこち拾い読みする権利
9. 声を出して読む権利
10. 黙っている権利

「読む」ためには「読まない」選択肢が必要なんだ。「本を読む本」の真逆を追求する，「見返りを求めない読書」のおかげで，ほんとうの喜びを味わえる。この10カ条で「本を読む本」を照らすと，もっと立体的な読書をすることができるだろう。つまり，目的に適ったスタイルを保ちつつ，楽しんで読めるのだ。

そういえば，わが子は「かいけつゾロリ　あついぜ！ラーメンたいけつ」を何十回も読んでいる。通読もするし，好きなとこだけ拾い読みするし，声に出して読むし，身振りで示しながら読むし，わたしに音読させたり，イシシとノシシで交代して読んだり，いろいろな「読む」バリエーションを思いつく。

とにかく読めること，読むことそのものを，じつに楽しそうに，「読んで」いる。彼の，自由な読書スタイルを見ながら，教えられる思いをしている。字を

教えたのはわたしだが，好きに読むやり方は，彼に思い出させてもらった。

人生は短い，合わないなら読まなくていい。大事だと思ったところだけつまみ読みすればいい。つまらなければ途中で放り出してもいいし，好きなところは好きなだけ読み返せばいい。濫読上等。小説と現実を混同したくなるではないか。分析的な読書も，シントピカルなテーマ追求もアリだが，なによりも目が見えているうちに，溺れるように読みたいね。

引用以上

*

これを読んで，『本を読む本』に欠けている要素に気づくことができた。それは「心躍る読書の楽しみ」である。

だが，「教則本」に「楽しみ」を求めるのはお門違いというものだ。やはり，『本を読む本』は論理を構築するための本であって，情緒を散策するための本ではない。もう一度繰り返す。『本を読む本』は偉大な「教則本」である。

*

書評は「バナナのたたき売り」のようなものであると思う。この紹介文をきっかけとして994円を支出して「バナナを買ってくれる」人が一人でもいてくれればうれしい。…バナナは時が経てば腐るけれど，本は腐りませんョ。

*

2016年4月23日（土）上田仮説サークル4月例会で発表

（紹介されてから3カ月経って，やっとこ紹介文が完成できた。欣喜雀躍。）